

I. 授業の概要

この授業は教育学部4回生後学期の専門教育科目である。

授業の目的は学会誌の研究論文や最近の研究著書を講読することによって、地理学の研究動向を展望する。発表やディスカッションを通じて、主体的に研究活動を行うための能力を向上させ、卒論の作成を通じて、地理学の研究手法などを習得するとしている。

授業の到達目標は、「学会誌をよく読んで、学界の研究動向を展望しながら、卒論の作成を通じて、研究スキルを向上させる」、である。

関連するディプロマ・ポリシー(DP)は、教育に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している(知識・理解)、自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる(関心・意欲)、である。

授業はゼミ形式で行なった。授業の内容と計画は次の通りであった。すなわち、

第1回 ガイダンス

第2回 研究計画の作成

第3回 関連研究のレビュー(1)

第4回 関連研究のレビュー(2)

第5回 研究目的や方法の検討

第6-7回 フィールドワーク対象地域の選定と調査の事前準備

第8-15回 フィールドワークの実施

第16回 フィールドワークの初期報告

第17-20回 対象地域でのフィールドワーク(補足調査)

第21-23回 フィールドワークの中間報告と内容の検討

第24-25回 調査データの加工と分析

第26-29回 卒論の執筆と修正(必要があれば再度補足調査)

第30回 卒論の完成と提出

1月31日に卒論の提出締め切り、受講生は2月15日(土)に開催された愛媛地理学会において口頭発表し、学会内外の専門家からアドバイスを受けた。さらに2月18日に行われた社会科教育専修卒業論文発表会においても口頭発表を行ない、指導を受けた。

II. 授業評価の方法と結果

授業評価は、卒業研究発表会の後で、面談形式で行ったが、卒論指導の過程において、ゼミ生とのやり取りの中で分かったことも含めて記述しておく。

まず、卒論研究を通じて得たものとして次のものが挙げられる。すなわち、①卒業論文のテーマを決めるため、さまざまなリソースから膨大な文献を調べた。その中で、如何に自分が必要とする文献を探し出すのかは最初の課題であった。情報化社会の現在において、資料が溢れているよりも情報が氾濫しており、本当に自分が必要とする資料はどれかを判断するのが難しい。情報を収集する作業よりも情報を捨てる作業の方が大事である。文献を乱読のうちに、研究の方向性が見えてくる。さらに文献を精読することによって、研究テーマが絞られていて、その過程で、研究方法も含めて検討することができた。②長い文章をまとめるのに自信をもつようになった。卒業論文は今までのレポートと色々な意味で異なり、それぞれの分野の学会の慣習やルールに則ってまとめるものである。レポートより分量が多いのも特徴の1つである。また、研究目的、研究方法、研究の成果、今後の課題などを含め、論文は体系的に構成されていること、文献から引用した部分とオリジナルな部分を区別して記述したことも理解した。③上述したように、卒業研究論文が長いため、ワードプロセッサを使用しても、文章全体を把握するのに難しく、文章を構造的に作り上げていくための章立て(完成時に目次にもなる)が必要であった。それまで使ったことのないワード **WORD** の目次機能を用いて、この問題を解決した。また、参考文献の挙げ方や注釈のつけ方においても、ワードのこれらの機能をマスターした。卒業後、教育現場においてもこれらの技能を生かされることを期待している。④学会デビューしたことも成果の1つであった。卒業研究が完了後、その成果を愛媛地理学会において口頭発表し、学会内外の専門家からアドバイスを受けた。学会デビューによって、卒業後の研究活動および教育活動により影響を与えたはずで

ある。

以上で述べたように、この授業は概ね当初目標に達成した。一方、地理学の分野では、フィールドワークを伴う卒業研究は普通であった。しかし、時間的な制約で今年度の卒論研究は、フィールドワークができなかった。ある卒論研究の中で、次のように今後の課題に関する記述があったので転載しておく。

「小学校における地図の活用について」ということで色々な視点から研究を進めてきて、たくさんの発見があった。私も小学校の教員になるものの一人として、この研究を生かして児童にとって魅力があって分かりやすく、将来に向けても役立つような地図学習を進めていきたいと感じている。ただ、このたびの研究では、実際に授業を行うといった実践ができたわけではない。教育実習などの実習の経験からも、授業などの実践から多くの課題や改善点が見つかることが大変多く、実践の大切さを痛感している。教員になってからもこの研究を続けるくらいの意識で実践から学び、今回の理論と結び付け、より良い地図学習が展開していけたらと考える。

さらに、この研究では国の調査をもとに考えを深めていったが、実際に自分の授業を受ける児童の声を聞き、授業を実践・改善していくことが大切だと考える。児童の生の声を聞き、その実態を生かした地図教育が行えるよう、私自身心がけていきたい。

これから先、さらに技術が進歩して、地図がどのように生活に関わってくるかが大きく変わる可能性もある。しかしいずれにせよ、地図の重要性は変わらずあり続けられるので、新しい情報に耳を傾けつつ、ニーズに合わせた地図教育を展開していくことが課題として挙げられる。」

Ⅲ. 次年度の改善点

次年度においては、上述したことを検討しながら改善していく。

具体的にいえば、卒業研究には可能な限りフィールドワークを必要とする研究テーマを設定してもらい、現地調査によってデータを収集するように学生と相談する（もちろん、研究内容によってフィールドワークを要しないものもあるが）。

課題としては、卒論研究のスケジュールの改善である。3回生後期の教育実習、そして

教員採用試験の準備を優先し、その合間に卒論研究とくにフィールドワークを実施することができるようにスケジュールを工夫することである。